様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 1 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０５７２
研究課題名（和文）江戸芸能市場の階層構造の析出とその歴史的変質に関する実証的研究
研究課題名（英文）An analysis of the stratification and historical change of the market in the arts during the Edo period

研究代表者
ジェラルド　グローマー（GERALD GROEMER）
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：50303392

研究成果の概要（和文）：近世の芸能市場に大きな役割を果たした門付け芸、寺社境内に行われた神楽の上演などに着目し、史料に即して江戸の門付け芸、寺社境内などに行われた芸能の実態を把握し、その歴史的展開、興行の形態と入場料、上演された演目、芸人の社会的地位、観客の特徴などを明らかにする。このような分析によって、江戸の「芸能市場」の階層性も可能となると思われる。

研究成果の概要（英文）：This research treats popular performers and performing arts of the Edo period, including street performers and performers active within temple and shrine grounds throughout the city of Edo. It seeks to utilize historical materials to trace the historical development of such performances, to discover their costs, the arts performed, the social position of the performers, and the characteristics of audiences. This research seeks to analyze the Edo-period “market of arts” and its stratified nature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、日本史
キーワード：近世史、芸能史、芸能市場、門付け芸人、神事舞太夫

１．研究開始当初の背景

山梨大学教育科学部生涯学習講座では研究のできる環境が整い、図書館は研究遂行に十分な一般参考書、参考書を所蔵し、学部では論文作成用の器具が揃っている。しかし、古文書などの芸能関係史料、近世史料のマイクロフィルム、専門的な書物などはほとんどなく、そのため東京あるいは外国で調査・収集を行なければならない。またマイクロフィルムをデジタル化できる研究に大きく役立つ機材も無いので、購入するのがのぞましい。

研究の主な動機は、市場に大きな役割を果たした門付け芸、寺社境内に行われた神楽の上演、小規模の芝居などに着目しながら、史料に即して江戸の門付け芸、寺社境内などに行われた芸能の実態を把握し、その歴史的展

開、興行の形態、上演された演目、芸人の社会的地位、観客の特徴などを明らかにすることである。このような分析によって、江戸の「芸能市場」の階層性も可能となると思われる。

研究代表者が江戸の門付け芸人、寺社境内の芝居と神楽などの研究に取組みはじめたのは平成6年、江戸東京博物館の研究員として勤務した頃からである。1990年代後半にはこの分野の研究が盛んになり、研究代表者も横浜における小芝居、「辻能」に関する論文を相次いで発表した。その後はまず近世の庶民文化と近世に展開した「芸能市場」をより広く捉えるように努力し、江戸のはやり唄、大道芸人、寄席芸などの実態の解明に力を注ぎ、ついで瞽女、神事舞太夫、近世の大阪の芸能市場、などの資料も蒐集しつづけてきた。本研究の開始にあたり、長年にわたり収集した断片的な資料に加えて、より広くかつ系統的に資料収集を行い、江戸の芸能市場の全貌を把握したいと考える。

２．研究の目的

様々な大道芸、盛り場や寺社境内に行われる芸能、門付け芸などを主な対象とし、各ジャンルを維持した社会的組織を分析し、近世の「芸能市場」の階層性と歴史的変遷を析出する。

本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法としては、国内の学術雑誌、あるいは英文の論文を国際的な学術雑誌に発表し、また国内外の学会に研究の口頭発表を行う。さらに、公演などを行い、一般社会に近世の芸能市場の関心を高め、また収集した資料類は学生の卒業論文の素材として活用する。

３．研究の方法

先行研究をはじめ、古文書など種々の歴史史料を収集・翻刻・整理する。特に江戸の神事舞太夫の芸能に焦点を合わせ、論文を作成、また小芝居・宮地芝居の資料を年表にまとめる。分析の結果を出物あるいは口頭発表として発表する。

江戸の門付け芸、寺社における神楽、芝居などを孤立した現象と捉えず、広範な芸能市場に位置づけることは、現在の社会史的研究の視点からも重要であり、その学術的研究はまだ緒についたばかりである。江戸に展開した広範な芸能市場は芸能の商品化・商業化を促進し、近現代日本の「芸能界」をはじめ、現今行われている演劇、音楽、大衆芸能などの興行の土台となし、その分析の意義は極めて大きい。芸能市場の中、門付け芸、寺社境内の神楽と芝居などの興行が不可欠な存在であり、一般庶民にとっては最も身近な娯楽のひとつであった。江戸市民の多くが頻繁に経験した門付け芸、神楽、宮地芝居などの実態を把握することは過去の演劇・音楽文化を理解することにとどまらず、現在の日本文化の形成過程を理解するためにも多くの示唆を与えてくれる。

この研究には例えば以下の一次史料などがもっとも役立つと思われる。

(1) 各地の村入用帳の記載（翻刻、未翻刻とも)。今回はとくに、山梨県南アルプス市西野中込家文書から瞽女関係記載に注目し、瞽女の巡業の実体を分析した。
(2) 『古事類苑　楽舞部』。民間芸能者の記録が多く含まれている。
(3) 『選要類集』(未翻刻)、旧幕府引継書所収。芸能者に関する法令、そして法令に含まれている実体の記述が研究に大きく役立つ
(4) 『町方書上』(未翻刻)、旧幕府引継書所収。(同上)。
(5) 『浅草寺日記』(浅草寺境内に行われた芸能の記載)。
(6) 『市中取締類集』(江戸後期の市内の事情などを綴る条。とくに候ｈっけ社人之部には宗教芸能に携わった者に関する記録が豊富)
(7) 『東京市史稿　市街篇』(天正から明治の法令など芸能に関わる史料)
(8) 『江戸町触集成』、芸能に関係する法令など。
(9) 「神事舞太夫共由緒写」(未翻刻、國學院附属図書館蔵)
(10) 「神事舞太夫由緒書」(未翻刻、東京大学史料編纂所蔵)
(11) 各地の市町村史の中の資料編
(12) 『藤岡屋日記』など、近世の日記類に含まれる芸能に関する記録。

また浅草寺に挙行される「びんざさら舞」の研究に当たっては、現地に赴きフィールド・ワーク（上演の録音と録画、舞手、囃子の演奏者のインタビュー）を行うことが欠かせない。収録した音を五線譜におこし、分析することにより、芸能の実体をより正確に把握することが可能となる。

４．研究成果

本年度には多くの史料を収集し、その翻刻、分析などを継続し、本年には論文４編（内査

読論文３編）を発表した。また研究成果に基づき大阪の芸能市場を分析する論文（本年発表予定）と単著の原稿を作成した（平成２５年出版予定）。

本年度の研究については以下の通りである。まず、以下論文 1（「瞽女研究拾遺」『万葉古代学研究所年報』第９号、１０５－１２６頁、査読無し）は瞽女に関する分析である。2007 年に拙著『瞽女と瞽女唄の研究』（名古屋大学出版会）で数多くの瞽女関連文献の解題を行ったが、その後も瞽女研究は深化しつづけている。2009 年以降には越後瞽女以外の瞽女の新しい史料も発掘され、瞽女研究の一助となっている。近世の甲府の瞽女については森本浩雅「甲府瞽女文書――幕末期の甲府瞽女の動向とその伝承について」、徳山藩の瞽女については吉積久年「徳山毛利家文庫〈御蔵本日記〉に見る座頭・瞽女」などは注目に値する。さらに視野を日本国外まで広げれば、永井彰子「中国にみる盲人文化」は極めて重要な研究成果といえる。

拙著では主に歴史学と音楽学の視点から近世社会の瞽女と瞽女唄の実態を把握することを試み、彼女たちを取り巻く社会的・文化的脈略の実証的な解明に努めたが、刊行からすでに 4 年近くが経ち、看過した史料の存在も次第に明らかとなった。本稿においては近年の研究に学びながら、新史料を紹介し、拙著の単純なミスの訂正・補足も行い、近世と明治期特に関東甲信越地方に活躍した瞽女について検討を加えたい。特に彼女たちの取り巻く社会的環境と近世芸能市場の発展に注目した。これに関連して、越後をはじめ駿河や武蔵、日本各地に伝承されている瞽女の縁起物には嵯峨天皇が「瞽女能」の 3 字を改め「瞽女カせき」、「後世加せみ」[瞽女]、「当世かせぐ」[ママ]などに定めたとある。武州の片山座（瞽女組織）が文化 1 年（1804）7 月に出した文書も「盲女能一同」という文言で結ばれており、この場合には「盲女」が「ゴゼ」と読まれたと考えられる。少し大胆に推測するなら、「瞽女能」は中世の「猿楽能」、「田楽能」と同様、特に伊豆、駿河、関東などの女性視覚障害者が「能する」（よく）芸能を指したのではなかろうか。嵯峨天皇がそれを「瞽女稼ぎ」「当世かせぎ」などに改めたことは神話の領域を超えないとしても、「ごぜかせぎ」は「芸者かせぎ」「日雇かせぎ」などと同様、能力、芸能というより、瞽女が「商売」と呼んだ職業の意味が強いと感じられる。つまり、時代が進むにつれて、瞽女が視覚障害者であるがゆえに「自然に」持つ能力があるというよりも、彼女たちが師匠から学んだ唄などを頼りに近世社会に花を開いた芸能市場に「かせぎ」に出たことが注目されるようになったと考えられる。

以下論文 2（Tamura Hachidayū and the “Masters of Sacred Dance、”*Japanese Journal of Religious Studies*, vol. 38, No. 2, pp. 303-328、査読有り）は、関八州の神事舞太夫たちが浅草寺の三社権現（現在の浅草神社）の神主であった田村八太夫の配下に置かれ、関八州ならびに信州、甲州、会津表に散在した者の研究である。田村家由緒書によれば、その出自は三河国であると伝えられる。各地方に活躍した神事舞太夫たちは祭礼時の舞、音曲や配札、祈念幣帛などの家職に携わった。田村家より以前は幸松勘太夫が頭役で、彼は宝永四年（一七〇七）に陰陽師家との出入りの不始末から頭役追放となり、翌五年幸松と代わり出あった八太夫が頭役に治まったとされる。

本稿は田村家の台頭、他家との出入り、八太夫の社会的立場などを分析し、近世の芸能市場の発展の中の神事舞太夫たちの組織の盛衰を析出した。

以下論文 3 （The “Masters of Sacred Dance” in Eastern Japan during the Edo Period、*Japan Review*, vol. 23, pp. 97-118、査読有り）は神事舞太夫たちの考察である。彼らは頭役の田村八太夫とともに、京都神道家からは独立し、将軍家の威光のもとに両部習合神道の一派を構えていた。神事舞太夫の名称は、八太夫から寺社奉行所宛書上に記される正徳二年（一七一二）の奥付が一番古い。この前後にも近世中期・後期の「神事舞太夫」たちの組織が完成したと思われる。

神事舞太夫が各地方において担当した芸能は主に、1. 水戸東照宮の奉幣神楽、四方堅、獅子舞、八乙女舞、2. 金砂大権現の祭礼に伴う神楽舞、3. 江戸三社権現の獅子舞と田楽舞、4. 千葉妙見の奉幣舞、烏舞、鹿子舞、千葉船の舞、結城船の舞、5. 相模国の録所大明神に行われる神楽、6. 相模国の高麗大権現の神楽であった。

本稿はこの 6 つの舞を個別に取り上げ、その歴史的背景を探り、近世の芸能市場を背景に各ジャンルの発展そして神事舞太夫の組織の発展と変遷について考察している。

以下論文 4 （*Binzasara*: Music and Dance at Sensōji in Edo/Tōkyō、*Yearbook for Traditional Music*, vol. 43, pp. 37-61、査読有り）は、現在の浅草神社は明治以前には「三社権現」と称され、浅草寺の鎮守に関する論文である。「びんざさら」（または「びんざさら舞」、「びんざさら踊り」「びんざさら祭

り」、「拍板舞」など）は中世、近世を通して三月十七、十八両日に行われてきた。現に五月十七日前後に挙行されている。

「びんざさら舞」とは、獅子舞と田楽と一緒になったものである。獅子舞に二人、田楽舞に五人の踊り手に加え、囃子は大太鼓、腰太鼓、笛が音楽を担当している。

本稿では江戸期の「びんざさら」の歴史を考察し、その社会的状況が大きく変わった明治～現在の変形をたどった。また現在行われている囃子を採譜し分析することにより、「びんざさら舞」の囃子の多様な音楽要素が混在している姿を明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1. Gerald Groemer（代表者）
Binzasara: Music and Dance at Sensōji in Edo/Tōkyō, *Yearbook for Traditional Music*, vol. 43, pp. 37-61, 2011 年。査読有り。

2. Gerald Groemer（代表者）
Tamura Hachidayū and the "Masters of Sacred Dance," *Japanese Journal of Religious Studies*, vol. 38, No. 2, pp. 303-328, 2011 年。査読有り。

3. Gerald Groemer（代表者）
The "Masters of Sacred Dance" in Eastern Japan during the Edo Period, *Japan Review*, vol. 23, pp. 97-118, 2011 年。査読有り。

4. ジェラルド　グローマー（代表者）
「瞽女研究拾遺」、『万葉古代学研究所年報』第 9 号、105-126 頁、2011 年 3 月。査読無し。

６．研究組織
(1)研究代表者
ジェラルド　グローマー(GERALD GROEMER)
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：50303392

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし